フレーベル遺跡巡禮の思い出

――開会の辞にそえて――

日本幼稚園協会会長
日本保育学会会長
全国保育連合会顧問
倉橋惣三

フレーベル先生が一八五二年六月二一日沒せられてから、本年が丁度百年に当ります。世界の諸国に於きまして、それ〳〵行事が行われて居ることゝ思います。吾国に於きましても、各地に種々の催しが行われたのでありますが、日本幼稚園協会、日本保育学会、東京都にあります公私立幼稚園保育所が共催致しまして、いわば全世界で行われる多彩なるフレーベル祭の一つとして、この講演会を催しました。私の名の上にいろ〳〵の肩書をならべましたのも主催の各方面をあきらかにする為であります。皆さんが多数御参集下さいましたことを、主催者の一人として厚く御礼申上げます。

今日の講演は、御報らせ申上げました如く、東京大学海後教授、東京教育大学石山教授両君の、フレーベル先生に関するお話を伺うことが主眼であります。両教授が吾国に於ける教育学の代表者として教育全般に亘り、当然その中に幼児の教育も含まれて居りますけれども、必らずしも幼児教育に限らず、教育全般に亘つての権威者であることは、更めて御紹介の必要もないことであります。今日は、教育学のこの両権威者から、フレーベル先生を、その教育者としての大いさと深さに於いて、十分に偲ばせて頂き度いというのが、我々の目的であります。ところで、先生の教育思想に関する理解を深めると共に、フレーベルその人を、その郷里に訪ねて、親しみを以つてこの人を偲びますことも亦、百年祭記念会と致しまして、皆様の御諒承を得うることかと思います。

フレーベル先生の郷里は、御承知の如く南ドイツ、ツーリンギヤ森林地方にあります。ツーリンギヤは、洵に広い深い森林地帯でありまして、シュワルワルド即ち黒い森とさえも呼ばれて居りますような濃い繁りのところであります。勿論フレーベル先生の足跡は、その地帯の中に限られて居つたのではありません。或いはイエナの大学に学び、或いはフランクフルトマインに参りまして、そこで図らずも――と申しますのは、フレーベル先生が、初めは林業、即ち山林のことゝか建築とか、云わば物的職業に就いて居つた人でありますが、どうも先生の理想性を満たすことが出来ませんで、人生的煩悶と申しましようか、随つて職業的放浪者となりまして、フランクフルトマインに参りましたのもその為でありました。そこで図らずも人間を人間にする職業というものに触れまして先生の理想性はそこに満足を得ました。先生の言葉を以つてすれば

「初めて魚水を得たり。鳥空を得たり」

と、自分の性格が処を得たという意味でありましよう、大に喜ばれたのでありました。そして直ちにペスタロツチに学ぶ為に、スイスのイベルドンに赴きました。その後奥さんの郷里でありますベルリンにも居りましたが、時偶普々佛戦争に遭いまして、若きフレーベルは、身を以て国を護ることなしに国家の青年を教育することが出来ようか、という考えをもつて義勇軍に投じて戦線に向いました。これらは総てフレーベル先生が郷里の外に出たことでありますが、それから心も身も教育に安定し、再びツーリンギヤ地帯の中にありますカイルハウに帰えり、そこに安定せる住居を造りました。そこで親友達に囲まれて、その仕事は簡単乍ら熟して居りました。そこで愛妻ウイルヘルミナを迎えまして、良き家庭を作りました。先生の教育に関する理念、或いは熱情は、この森の中の実に淋しい村で熟しました。先生の主著であります「人間教育」という著述も、その他の論文も此処で多く出来たのであります。

そのカイルハウから峠を越したところにブランケンブルヒがありまして、これ又へんぴな田舎町であります。

私はベルリンに居りまして、冬の学期の暇を利用してフレーベル巡礼に出かけましたのでありますが、先ずこのブランケンブルヒに逗留して、そこからあちらこちらを歩き廻りました。ブランケンブルヒには、フレーベル先生が初めて作られました世界最初の幼稚園の建物も、実にさゝやかなる家でありますが、今日も猶遺つて居りますし、その他フレーベル博物館――フレーベル先生に関する色々な遺品が集めてありますし博物館がありまして、研究者には、種々の資料が得られるところであります。私はカイルハウで「人間教育」の初版の残つているのを見出し、ブランケンブルヒ博物館で「母と

子遊戯歌」の初版にあい、踊る胸にそれを抱いて譲り受けて帰りました。私にとつて最も貴重な宝物になりました。

そこに先ず足を留めまして、それからフレーベル先生の生れた家のある、オーベルワイスバツハを訪ねました。これはブランケンブルヒの奥の高原にあり、私は雇い馬車で参りましたが、約半日の道程、いわば中央線の通わない前の木曽街道と申しましようか、芦蕉が通りました木曽の山道は、こんな処かと思われるような森、木下やみの渓流に添つて坂道をのぼるのです。先生の生れた家は、先生のお父さんが牧師でありました如く、今も牧師さんが住まつて居りますが、実にさゝやかな家であります。たゞ、その家を囲んで居ります垣根これがフレーベルの自伝をお読みになりました方は御承知の如く、子供フレーベルの頃の生い立に関係深い垣根であります。生れて僅か九ケ月で母を喪い、牧師の仕事に殆んど家のことを顧る暇の無いお父さんの下に、フレーベルの幼時は極めて淋しいものでありました。家庭的に孤独な子供はその垣根の中に楽しみを求めて、そこでフレーベルの冥想的な、然し又自然を深きところに於いて感ずると云つたような性格が幼な心に種を下ろしたことゝ思います。その垣根の木は幾春秋変つていますが、垣根を越して眺められる向うの山々は、フレーベル先生の頃と変らないと思います。オーベルワイスバツハは、今でも少しも近代化して居ない山村ですが、この山に囲まれた閑寂の高原こそ、幼年或いは少年フレーベルの心に、静かな感化を与えたものと思いました。

そのオーベルワイスバツハや、ブランケンブルヒや、カイルハウこそ、――フレーベルが幼稚園というものをブランケンブルヒに作りましたのは五十五才の時でありますが、――フレーベルの故郷であり、今日のいわゆる幼児教育の思想が熟した心の故郷であります。先生はカイルハウに住まつて居つて、ブランケンブルヒに幼稚園を作りまして、そこへは峠越しに通つて居つたのでありますが、初めてキンダガルテン――訳して幼稚園という言葉を思いつかれたのは、この峠道の途中です。私は遺跡巡礼者の気持から、その峠の土に額づくようの思いでそこらあたりが一つ〳〵なつかしく思われたのであります。此処でキンダーガルテンという言葉を思いついて、ブランケンブルヒを望んで大声を上げられた地点は何処だろうかと、山の中をたづねました。いさゝか馬鹿げた巡礼振りでありまして、こゝでフレーベルがキンダーガルテンと叫んだという棒杭など勿論立つていよう筈もありませんが、兎に角、それらの地域が、フレーベル先生のキンダーガルテンの故郷であります。

それから段々自分の事業を国外に拡めまして、遂いにリーベンシユタイン――温泉場と云いますと何となく派手な感じ

が致しますが、ほんの田舎の温泉でありまして、そのリーベンシュタインに定住して、そのそばに在るマリエンタールに幼稚園を開き、吾国の言葉でいえば、保母養成所を開き、これが先生の晩年の安定の場処になりました。

その安定も、実は極く短いことでありまして、もうその時は七十歳に近くなつて居りましたから、極く短い定住で殁せられた訳でありますが、そのリーベンシュタインの高原の森の中で、あの有名な「馬鹿親爺」という名前を、フレーベル先生が得られたのであります。七十歳の垂々とする老翁が、子供達と一諸に遊ぶことに沒頭、沒入して居る姿は、大抵の心ある人にも「馬鹿親爺」としか見えなかつたことでしよう。

其処の土地は、後世の人達も大事な場処と考えて居ると見えまして、恩物を像りました記念碑が建てられていますが、四方に森を控えて遠い山々を見はるかす、実に景色の良い場処であります。私はその記念塔の前に立つて思いにふけり、又そのあたりの幾つかの写真を撮つて持つて帰えりました。その持つて帰えりました、甚が鮮明度の薄い、焦点の合わない、幾つかの写真と、私の心の中にはハツキリ映じて居りました記憶影像とを合わせて、今日の芸術会々員寺内万治郎画伯に御相談して描いて貰いましたのがこの絵（演壇に飾られた額を示す）であります。こちらの正面の肖像の方はブランケンブルヒの博物館で手に入れたのでありますが、フレーベルという人は、実は余り愛嬌のある顔をして居りません。後に幼稚園令が、思想的誤解を以つて禁止された原因は、馬鹿々々しい色々な誤解がありましたけれども、このフレーベル先生の愛嬌の無い長髪の顔も一つの原因だと、或る人が書いている位であります。（笑声）——あんなに子供を可愛いがつた人、あんなに子供になつかれた人、という感じは、どうもこの肖像と合いません。そこで考えますのに、フレーベル先生が子供を愛しましたり、子供に愛せられたのは愛嬌などゝいうものでありません。当時の先生を親しく尊敬したマレンホルツ・ビューロー夫人は「子供を観るフレーベルの目は子供の顔や姿でなく、子供の中にある、自ら発達して行く神性を観て居るのである。」と書いています。その眼で観られた子供は、又フレーベル先生を、たゞ子供心だから愛して呉れるというだけでなく、慈しんで呉れるというだけでなく、況やおもちやにするという人でなく、子供が自分でも気がつかない育ち行く神性を見てくれる眼として、即ち誰れよりも子供の知己の眼として親しんだことに相違ありません。フレーベル先生がブランケンブルヒでも、リーベンシュタインでも町の道を歩いていると子供が飛びついて来たということでありますが、此の真面目な肖像の顔では、どうもその光景に結びつかない。そこで何とか子供と結びついている時の顔をと考えまして寺内画伯に御相談して、土地の人が「馬鹿親爺」

と見た顔、即ち厳粛なる深刻な哲学者と違つた姿を出して貰つたのであります。ペスタロツチの顔もフレーベルの顔に輪をかけたような怖ろしい顔で奥さんのアンナ夫人も、そう書いている程でありますが(笑声)――『スタンツに於けるペスタロツチ』の名画では、子供の中に溶け込んで居ります。その『スタンツにおけるペスタロツチ』に、或いは並ぶものとしてこの『子供と遊んでいるフレーベル』を私は大変尊重して居るのであります。

この辺のお話は、丁度明日(六月二十四日)の午前九時半から、NHKの「光をかゝげた人々」という放送で『幼稚園の父フレーベル』をドラマタイズされたものが放送されることになつています。ラヂオは態々此会場までお出で願わなくともいゝですから、お宅でくつろいで御聴き下さるよう願います。――前にこの画を御覧頂いて居りますと、情景自ら浮び来たると思うので御座居ます。私はそのシナリオに関係致しましたが、私がそこで芝居をするのではありませんから、その辺お間違えないようにお願い致して置きます。(笑声)――

そういうリーベンシュタインの生活は、フレーベルの一番生粋なところかと思います。本当のフレーベルの姿は、リーベンシュタインの「馬鹿親爺」にあると思います。その時の子供達は、大抵跣足の子であり、半ば裸の田舎の汚い子供であります。今日幼稚園と申しますと、いわゆる坊ちやん、嬢ちやんの集る幼稚花園を連想する人もありますが、私は先日或る会でも申しましたことですが、百年祭でフレーベルを仮に日本に迎えて、今の日本の幼稚園教育を観て貰つたとすれば意外な感を持つのじやないか。勿論美しい着物を着ている可愛い顔をしているのも、子供の本質に於いて、下に差別ない如く、上にも差別無い訳でありますけれども、フレーベルの作つた幼稚園は、今日で云う寧ろ托児所の外観であります。農繁托児所の形式であつたのであります。その中に――私が自分の主観を申上げて相済みませんが、その農村の貧しき農夫の子供達を少しも侮どらなかつたことは勿論、貧しきが故に、裸、跣足でいるが故に哀われむという心を起すよりもたゞ子供の中にある自ら伸びて行く力、それを見詰めて一緒に遊び暮して居たのであります。フレーベルは、実にリーベンシュタインに於いて、その事業に非ずして、その精神の生粋を発揮したものです。但しフレーベルは其前にベルリンの托児所を視察して失望しています。境遇に憐れむだけで、子供の自発的発達を尊重することを忘れていた、当時の托児所に失望しています。

やがて、あの老フレーベルにとりまして、洵に気の毒でありました幼稚園禁止令が出ました。プロシヤの反動政府は、

フレーベルの幼稚園に対し、或いは事実上は同じ名前の間違つた人を狙つたのだとも云われていますが、兎に角禁止令を出しました。その禁止された儘の中に、フレーベルは死んだのでありますが、然しフレーベルを理解する者は、そんなことに関係なく、先生の説を聴いていました。

フレーベル先生は、大変自然を愛する人で、オーベルワイスバツハの田舎に育ち、森の中で林業に従事した人でありますから、文化人と云うより寧ろ泥臭い田舎人でありました。フレーベルの死んだ時の姿が斯う書いてあります。

「最後のベットから、窓を開けさせては、外の自然を観た」と。

外の自然は、六月二十日あたりのことでありますから、緑蔭こまやかな自然であります。子供達は先生の好きな花をあちらこちらから摘んで来て枕辺に置きました。自分のやつた幼稚園が自分の国で禁止されましたらば、外国へ行つてやろう、新らしい自由の国アメリカに行つてやろう、とまで悲壮な決意を致して居つたフレーベルでありますが、その死の床は実に安らかでありました。その辺の子供の親達、学校の先生方、殊に多くの子供達に送られましてシュワイナの町に葬られたのであります。

私が其処ら辺りを巡礼しましたのは、先程申上げましたような関係で、冬でありましたが、その辺を歩くには適当な時期ではありませんでした。四月二十一日生れて、六月二十一日に亡くなりましたフレーベルの故郷を歩きますには、春先から丁度今の新緑の時期であるべきだつたと思います。私は寒い冬の旅でありましたので、其処らの新緑のツーリンギヤをそのまゝ思い出すことが出来ないのは遺憾でありました。然し乍ら私が思いますのに、新緑は自然界の永遠の蘇りでありましよう。あゝ四月二十一日、六月二十一日。私共はフレーベル先生の遺想に於きましても、子供を愛する心の永遠なる蘇りを感ずるのであります。

シュワイナの墓地は洵にさゝやかなる墓地でありまして、矢張り恩物を像りました墓地石がありますが、そこの入口迄田舎の馬車屋さんに乗せて貰いまして、その入口からは馬車屋さんの十二、三の娘さんに案内されてお墓にお詣りしました。ドイツの子供で、実に頬の肥えた、よくリンゴのような頬と云いますが、少々ドス黒いリンゴのようでありました——笑声——私はそこでお墓に向つて色々なことを語りました後で、その娘に、

「貴女は此処に眠つている人を知つている？」

と云いますと

「ヤア」

と云いますので

「どういう人？」

と聴いてみました。私が人にものを聴き、答を得て嬉しかつたことの中でも、これが最大の思い出でありますが、その子供は、フレーベル先生は大教育学者だとは云いませんでした。そう云つても宜いのであります。云わないのは、彼女が何も知らないからでありましよう。又、フレーベル先生は、キンダーガルテンの創設者であると云えば、もつと適格ですが、そうも云いません。実に無邪気な顔でいゝました。

「キンダ・フロインド！」（子供の友達）

フレーベルの為に云つて呉れたのか、私の為に云つて呉れたのか、実に嬉しくも云つて呉れたのであります。私が、先生が子供と遊び呆けた姿をリーベンスタインの丘の上で思い浮かべていたその午後、その村の子供から「子供の友達（キンダーフロインド）」の言葉を聴いたのであります。私のフレーベル遺跡巡礼の締め括りとして、何という嬉しいことでありましたろう。

フレーベルの有名な言葉、

「いざ吾等を、子供と共に生きしめよ。」

ということは色々と深い意味に解せられますが、その先生の言葉を、子供の方から云えば、

「先生じやない、キンダーフロインドだ。」

と、云いましたその少女の言葉そのまゝになります。私が嬉しかつたばかりではなく、その墓石も実に嬉ばれたものと思います。

今、そのシュワイナの森は、鮮かな新緑に包まれていると思います。私は、その新緑の中に「キンダーフロインド」と呼ばれて眠つて居られますフレーベルの墓に、も一度行つてみたい気持で堪え難いのであります。

これで私のお話を終りますが、私の今日のお話は、開会の辞に添えましての、ほんの思い出をお聴き願つただけであります。今日の会の主なる部分では決してありません。主な部分は日本の教育界の権威者によりまして、世界の教育者フレーベルを考えあつて頂くことであります。

私は、その有益なお話を前に、フレーベル先生に対する親しみを皆さんと少しばかり話しあつただけであります。御怠屈であつたと思います。これから、海後さんと石山さんとのお話をよくお伺い致ましよう。

—拍手—